産経新聞　朝刊　和歌山版　2024年5月12日

くじら日記

太地町立博物館から

55年前オープン 当初の雄大な光景

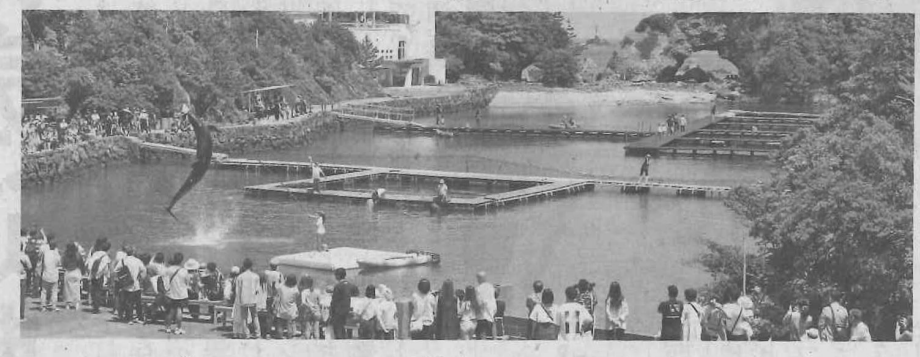
鯨類飼育の変遷①

4月2日、1969（昭和44）年にオープンした太地町立くじらの博物館は開館55周年を迎えました。くじらの博物館では、1980（昭和55）年から毎年、開館記念日のこの日に「飼育動物供養祭」が執り行われ、今年で45年目を迎えました。

朝8時、職員ら約30人が、施設内の供養碑の前に並び、僧侶の読経に合わせて順番に焼香し、手を合わせました。ここで命を落とした飼育動物をしのび、冥福を祈るのです。

1968（昭和43）年に太地町に奉職し、オープン前からくじらの博物館を支えてきた前館長で顧問の林克紀氏は「55年間、飼育動物とともに歩んできた。苦労は絶えなかったが、今のくじらの博物館があるのは、ここで暮らした動物たちのおかげ。感謝している」と言います。

絵はがきの写真に写っていたくじらの博物館の「鯨プール」。コビレゴンドウの群れが泳いでいる＝昭和44年、太地町



「鯨プール」は現在、「自然プール」と呼ばれ、桟橋や網いけすが設けられている

くじらの博物館には、オープン当初に鯨類をどう飼育していたかわかる写真入りの絵はがきが残されています。

写真には、切り立つ山に囲まれた美しい浜辺と岩礁、そして人が通れるほどの大きな穴が空いた一対の奇岩「めがね岩」が写りこんでいます。この風光明媚（ふうこうめいび）な海岸線からなる湾を仕切った天然の「自然プール」に、コビレゴンドウの群れが放し飼いにされている様子も写っています。壮麗かつ雄大で、まるで彼らの自然界での暮らしを、そのまま切り取ったかのような絵面です。それを眺める来場者の姿も写されていますが、当時まだ珍しかった鯨類の展示に目を奪われたことでしょう。

この自然プールは当時「鯨プール」と呼ばれ、くじらの博物館の発案者で町長だった庄司五郎氏が「鯨プールには鯨を放し飼いにし、かたわらで鯨のショーも見せる計画である」と、雑誌「水産世界」の1969年2月号に記していました。その一部が実現したものでした。

ただ55年がたち、その景観は変わりました。海岸線には遊歩道が整備され、その先に水族館が建てられました。開放的であった自然プールには、桟橋や網いけすが設けられました。飼育される鯨類も種類が増え、飼育技術が向上しました。

林氏は「動物に向き合い、来場者のことを考えてきた結果、今の姿になった」と言います。くじらの博物館オープンから55年。鯨類の飼育がどのような変遷をたどったのか、ひもといてみたいと思います。

（太地町立くじらの博物館館長　稲森大樹）

◇

今回は第2日曜日ですが、原則、第1日曜日に掲載します。